

麝香の恩恵—薬物と薫物

中村祥二（会長）

はじめに

麝香（英名:musk, 仏名:musc）は天然香料の中でもっとも神秘的なものである。ここでは麝香の概略、薬物と薫物について述べてみたい。

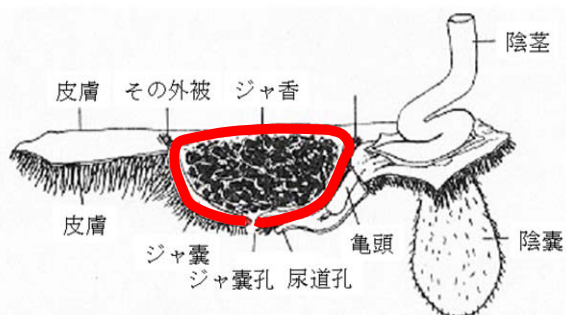


麝香鹿

麝香とは何か

麝香は、香りと長年関わってきた私にとってもっとも興味ある動物性香料である。その香りはごくわずかの量を香水に加えるだけで、優れた効果を醸し出す。香りにコク、幅、温かさ、女らしさ、セクシーさなどを与え、広がりのあるものに変えてしまう不思議な力を持っている。中国最古の薬物書『神農本草経』によると、「この麝香を、久しく服用すると、邪気を除き、夢を見て跳び起きたり悪夢にうなされることなく」とある。

麝香は麝香鹿（*Moschus moschiferus* L.）の雄の下腹部あるクルミほどの大きさの香囊（図の赤線で囲った部分）を切り取って乾燥させたもので、最も高



雄鹿のジャ香囊(musk pod)と生殖器

価な香料である。麝香鹿は中国南西部やチベットに棲息している小型の鹿で、日本では動物園にもいない。日本人で野生の麝香鹿を見たことのある人は殆どいないという。それでは剥製はあるだろうか。私は富山で2番目に大きい製薬会社を案内してもらった時と札幌の北海道大学博物館の2カ所で見たとがある。博物館では関心を持つ人もあまりいないのか、ほかに詳しく見る人もいなかった。思ったより小さい鹿であった。

麝香は、昔も今も黄金よりも高価で貴重である。高級品とされているのは中国、チベット産のトンキンムスクである。日本の平安時代の記録（1073年）によると13臍の価格が米500石とある。香囊一つを意味する1臍が現在の貨幣価値に換算するとおおよそ288万円に相当するという。ワシントン条約規制前の価格は、香囊は1kg250万円で、純粋な中身の顆粒だけのもので、1kg800万円だった。

現在、麝香の取引、使用はワシントン条約で規制されており、日本において漢方薬、香粧品に用いることはできない。ただ、長い間これを使った実績のある救心、六神丸などの生薬強心薬、小児五疳薬には使用が許されている。富山の一番大きいという製薬会社を訪ねた折、麝香についてたずねたところ、大量の在庫を持っているので困ることは全くないという話だった。

中国四川省を中心に、人工飼育が進み香囊を切り取らずに麝香を反復採取することが研究され、1000頭以上の麝香鹿が飼育されているということだった。1982年頃、視察団の誘いがあり私の研究室からも1名が参加した。1gで1万円程のお土産の麝香油の香りを嗅いだ記憶がある。その後、人工飼育による麝香の採取のニュースに注意しているが、飼育が成功しているという話は聞かない。

ちなみに英名のムスク（musk）という語源はサンスクリット語で辜丸を意味する。しかし実際には前述した通り香囊であり、これは間違いである。漢名の麝香は、その香りが獵師の射る矢のように遠くまで飛ぶという意である。香りの性質をよく表している表現だ。

麝香は香りに拡がりを持続性を与える

12世紀に建立されたイランのタブリーズにあるイスラム寺院の漆喰の壁に練り込められた麝香は陽光に暖められると、今なお香るといふ。香りの持続性が長いのだ。それならば他所でも試せるところがあると考へて、パリの西郊にあるナポレオンの后だったジョゼフィーヌのマルメゾン宮殿を訪れてみた。現代バラの女王といわれる彼女のバラ園を見るためと、麝香を愛した彼女の寝室に今でもその香りが残っていて、感じられるのではないかという期待からだ。しかし、200年たった寝室から麝香らしい香りは私の鼻をしてもどうしても感じられなかった。

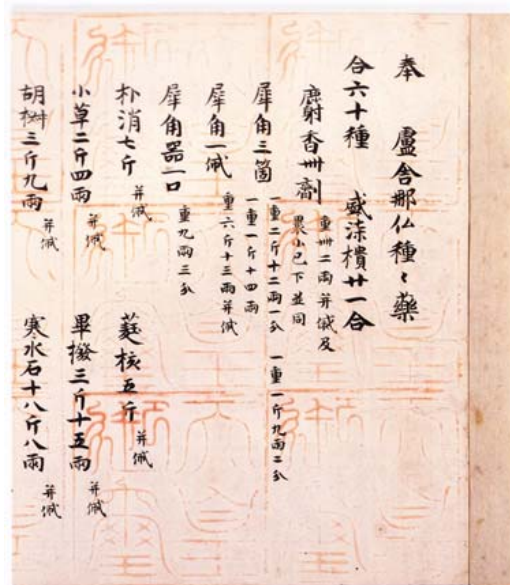
そこで、麝香の主香成分であるムスコンで試してみることにした。無色透明の鉛ガラスを思わせる光を秘めている液体を匂い紙に3cmほどつけて8畳ほどの部屋に置きその匂いと持続性を調べてみた。戸を開けてその部屋に入るといつもとは違う雰囲気を感じた。ぽっと温もりのある優しい空気、そして女の人がいるような気配が広がっていた。不思議な感覚だ。匂い紙の香りは弱くはなってくるものの、3か月間持続した。予想していたよりも少し短かったかな、と思う。

麝香の成分と合成香料

この魅惑的な麝香の成分は19世紀初頭から有機化学者たちによって研究が行われてきた。1939年にはムスクの主香成分ムスコンの発見などの業績でL.ルジチカはノーベル化学賞を受けている。

香料化学の進歩に支えられ大環状ムスク化合物の研究が精力的に行われてきた。その結果、ジエステルムスク（ムスクTなど）、ラクトンムスク（シクロペンタデカノライドなど）及びケトンムスク（ムスコンなど）が開発され、香料業界での利用が広がっている。ムスコンに関しては天然型の光学活性なL体も多くの合成法が開発されている。

高級香水に上記の優れた香りの合成ムスク類がホワイトムスクという名称で使われている。また、安価な合成ムスク化合物を用いたムスクベースが開発され、日常的に使う洗剤や入浴剤などに配合されるようになってきた。



『種々薬帳』目録の巻首

薬物としての麝香

麝香は『神農本草経』の365種類の漢方薬の頂点に立つ。強心、鎮静、鎮痙作用があり、命を養う効果があるとされてきた。

麝香は我が国では正倉院に宝蔵されてきた『種々薬帳』目録の冒頭に載っている。天平勝宝8年（西暦756年）光明皇后は、聖武天皇の七七忌に当たり、国家の珍宝と60種の薬物を東大寺大仏に献納した。光明皇后の願文によれば、もし病に苦しむものがあれば僧正に連絡して使用してもよいこと、そして薬を服用したものは万病が癒え、苦しみから救われることを願っている。天平宝字5年（761年）には、宝庫より麝香、犀角など多種多量の薬物が出蔵され内裏に進上されたほか、僧や諸人の施薬料に充てられた。この様に、その後も度々、実際に麝香、犀角、桂心、人參、甘草などの薬物が出庫されて使用された。

徳川家康は養生に極めて関心が深く、自ら薬を調合するのが半ば趣味だったという。愛用した処方の中でも、特に家康が秘蔵の処方「紫雪」には麝香が配合されている。

私は体調は悪くなかったが麝香を舐めてみることにした。細長くて先が丸いへらを、この麝香に差し込んで、原形を壊さないように注意深く中身をかき出した。やや湿った感じの黒褐色の顆粒状のものがこぼれ出てきた。少量を手のひらに取り、わずかの水をつけてこすってみる。色がにじまない。これは、

血液などで偽和されていない証拠だ。次に舌の上のせて味わってみる。弱い苦みがある。湿った薬臭さの中に、澄んだ清涼感がある。これこそ本物である。黄金よりも高価な麝香は、人々を偽物作りの誘惑に駆り立てるから注意しなければならない。

この鑑定をした後、しばらくすると奇妙なことが私のからだに起こった。初冬の夜の研究室は、その時暖房も切れ、冷気が広がってきていた。それなのに、体が温まり始め、手足に伝わっていくのが感じられた。心臓の鼓動も速くなってきたようだ。私は、霊薬を飲み込んでしまっていたのに気づいた。味見の量が多すぎたに違いなかった。

思いがけず麝香の伝承された薬理作用を身をもって体験することができた。

薫物としての麝香

仏教伝来とともに、仏前に薫る「供香」はたえまなく焚かれ、そして「薫物」は天平時代に香り文化の花を開かせることになった。鑑真和上が2回目の渡来に失敗したときの積載品の目録によると麝香、沈香、甲香、甘松香、竜腦香など11種の香木・香料の名前がある。鑑真和上は高価で貴重な香薬類の鑑定にも長けていたという。天平19年(747年)の法隆寺資財帳にもこれに近い名前が載っている。そして、これらの名前は『源氏物語』に出てくる薫物の主材料のほとんどを網羅している。

〈源氏物語の新春の六条院の描写〉

春のおとどの御前、とりわきて、
梅の香も御簾のうちの匂ひに吹きまがひて、
生ける佛の御国とおぼゆ。(初音)

「六条院の中でも、とりわけ、紫の上の住んでいらっしやる春の御殿のお庭は、梅の花の香りが風に乗って吹いてくると、御簾のうちの空薫物の匂いとまじりあって、まるで極楽浄土かと思われるばかりです」(現代語訳は尾崎左永子氏による)

薫物の香りによって極楽浄土を地上に実現したような雰囲気を感じる。

平安時代の源公忠朝臣(889-948年)の薫物の処方には麝香が含まれている。公忠朝臣は平安時代の歌人で三十六歌仙のひとり。光孝天皇の孫で宮廷歌

人として活躍したばかりでなく香合、放鷹の名手としても知られる。「黒方」は格式の高いお祝いの時に使われたもの。本来、冬の方(処方)であったが次第に四季のものになっていった。

「黒方」	『薫集類抄』より		比率
	処方量		
沈香	四両	96 朱	6.7%
麝香	二分	12 朱	
甲香	二分	12 朱	
丁子	二両	48 朱	
薫陸	一分	6 朱	
白檀	一分	6 朱	
		180朱(7.5両)	

この「黒方」は麝香の香りがかなり強く感じるという。そして、この方を旨く表現するためにはかなり高級な沈香が必要である、とこれを再現した日本香堂の研究室室長である鳥毛逸平さんは述べている。梅の頃、鳥毛さんから戴いた薫物のうち、合香の名手、山田尼の方による「梅花」を選んで薫じてみたいと楽しみにしている。

終わりに

現在、麝香を見たり、その香りを嗅いだりすることは難しい。漢方薬や生薬の会社、香料会社、化粧品会社を訪問して展示用のサンプルの瓶に入った麝香を見せてもらうのがよい。麝香その物入手することはできない。サンプル瓶の麝香を補充することができないからだ。本文中のムスクの主香成分ムスクなら試すことができる。そして、自分の部屋で香りや持続性を試してみるのも面白いだろう。合成香料のなかで最も高価なものであるにしても少量であれば買うこともできる。

薫物を実際に経験することは中々ない。例えば、大学などの公開講座で薫じることがある。インターネットで調べてみると薫物のワークショップ、古典文化講演会、平安貴族の練香作りなどある。私も、著名な大学教授の『源氏物語』の講座に出席をした折に薫物の香りを体験したことがある。「梅花」だったと思う。麝香が香り全体の中でどの程度効果を発揮しているのか嗅ぎ分けるのは難しかった記憶がある。もっと修練を積まなくてはいけない、というのが私の感想である。

参考文献

- 1) Bork K.H. 『VENUS』 vol 12
国際香りと文化の会 p86 1990
- 2) 藤田路一 『生薬学』 南山堂 p159 1957
- 3) 中村祥二 『香りの世界をさぐる』 朝日新聞
p55 1989
- 4) 山本 健、中村祥二 『香りの百科事典』
丸善株式会社 p833 2005
- 5) 第 62 回正倉院展図録 p36 2010
- 6) 尾崎左栄子 『源氏の薫り』 求龍堂 1986